時津町は「家読」を推進しています

たまには テレビをけして

高学年向け　２０２４年　冬号

家読とは

家族みんなで好きな本を読んで、読んだ本について話す。これが「うちどく（家読）」です。

難しいルールは要りません。

家族みんなでルールを決めてはじめてみましょう。

家族で同じ本を読みあったり、おとうさんやおかあさんに読み聞かせをしたりと楽しい時間を過ごしましょう。

「クリスマスのりんご　クリスマスをめぐる九つのお話」

ルース・ソーヤー、アリソン・アトリー/ほか文
上条 由美子/編・訳 たかお ゆうこ/絵
（福音館書店）

ヘルマンという時計作りのおじいさんがいました。子どもたちのお人形を直してくれたり、困っている人には家にあるものをあげる親切なおじいさんでした。この町には、クリスマスに大聖堂の聖母マリアとおさな子イエスに贈り物をするという習わしがあって、自分の二日分の夕食のりんごしかもっていくことができなかったヘルマンですが…。

ほかにも8つの物語が入っていて、待ち遠しいクリスマスを一段と楽しくさせてくれますよ。

「ジャングルのチョコレート工場　甘いチョコの甘くない現実に挑んだ大学生」

横山 亜未/著（ポプラ社）

小さい頃からチョコレートが大好きな田口愛さんは、原料のカカオに興味をもち、大学生になるとガーナに行きました。実際にカカオ農家の人たちとふれ合うと、カカオ栽培をしているのにチョコレートを食べたことがないことを知ります。愛さんは「チョコレートにかかわるすべての人がしあわせであってほしい」という思いを胸に「カカオ革命」に挑みます。愛さんの献身的な活動に心が動かされます。

「森は生きている」

サムイル・マルシャーク/作 湯浅 芳子/訳
（岩波書店）

冬のさなか、わがままな王女が、４月に咲くマツユキソウを「新年までに届けるべし」という、おふれをだした。そのほうしょうは、かごいっぱいの金貨と、ビロードのシューバ（コート）。

寒い雪の夜、欲に目がくらんだまま母に、マツユキソウを探しに行かされた、ままの娘。彼女が森の奥で出会った12人の精霊たちがしてくれたこととは…。ロシアの詩人、マルシャークが書いた戯曲です。登場人物のセリフで構成されているので、読みやすいですよ。

「ジャムおじゃま」

マーガレット・マーヒー/文 ヘレン・クレイグ/絵
たなか かおるこ/訳 （徳間書店）

カッスル家は5人家族。パパは、かしこいママがじまんでたまらない。ある日ママはおつとめにでることになった。「でも、ぼくたちはどうなるの？」しんぱいそうな顔の子どもたちに「パパにまかせろって。しんぱいごむよう！」

主夫になったパパは、家事もかんぺき！そんなある日、屋根に、うれたプラムの実が落ちていることに気が付いたパパは、プラムジャムをたくさん作った。でも作りすぎて、ジャムを入れるビンが、たりなくなって…。べたべた、あま～い1冊。

「石の神」

田中 彩子/作 一色/画（福音館書店）

石屋「大江屋」の石工見習の寛次郎と、「荒れ地」からやってきた申吉（捨吉）。生まれや育ちなど全く違う二人の少年。一流の石工を目指す寛次郎と天才肌の申吉が、ある日勝負をすることになった。二人は地蔵を彫ったが、申吉の彫ったものは…。

石工修行の中で、少しずつ心を開き、お互いを認め合う寛次郎と申吉。申吉と「石の神」との関係にも注目です。読むと胸が熱くなる作品。

「むげんことわざものがたり」

大串 ゆうじ/作（偕成社）

ことわざや慣用句だけでどんどんお話がつながっていく絵本です。しかも、とってもおもしろいんです！

最初と最後の見返しには、絵本にでてきたことわざや慣用句の説明もあるので、家族で楽しみながら読んでみてはいかがですか♪じっくり観察すると細かい絵にも、いろんな発見がありますよ！

発行：時津町立時津図書館